

東大見学会・企業大学訪問 感想文

企業訪問

アクセルスペース、それは大学生が作った宇宙開発に関する企業だ。私たち2班はアクセルスペースを訪れた。なぜなら国家などといったような縛りのない、民間の、しかも学生が作った企業に興味を持ったからだ。

私たちはまずそこで、会社についての説明を受けた。アクセルスペースが飛ばした「人工衛星一号機」とも呼べるであろう「ほどよし一号」の撮った衛星写真のタペストリーが社内にくっつか並んでいた。ほどよし一号の画像解像度は6.7メートルらしいが、衛星写真の全てがとてもきれいで、地上で言う一眼レフの最新デジタルカメラでとられたようだった。

アクセルスペースは今後、「アクセルグローブ」と呼ばれる事業を展開しようとしている。それは、将来的には50機もの小型人工衛星を飛ばし、一度に地球の半分を観察できる特性を活かしてインフラや農業、気象予報などに活用するというものだ。そのアクセルグローブで飛ばされる「GRUS」という小型人工衛星の地面の画像解像度は2.5メートルであり、それは実に「ほどよし一号」の6から7倍を誇っているのだ。私たちが感動した写真より遥かに良いものが撮れるのだろう。そこで私たちが気になったのはプライバシーの問題である。そんなに多くの人工衛星によって宇宙から観察されたら何か問題があるのではないかと思ったのだ。しかし、「GRUS」の地上分解度は前述したとおり2.5メートルなので、車一台分が分かるかどうかくらいらしいので、これは規定内のようだ。安心！ またもう一つの疑問として、これだけ多くの人工衛星が地球の周りを飛んでいたらぶつかってしまうのではないかと。ということだ。それに対しては、宇宙は広いのでまず重なることがないし、NASAが全て間隔を管理しているらしい。

次に私たちは社員さん方が実際に働いているオフィスに入った。コンピューターが並んでいるデスクの横にまさに小型人工衛星を組み立てている場所があったので驚いた。工場とかで作っているのを想像していたが、アクセルスペースは工場を持っていないと社員さんはおっしゃっていた。もちろん組み立て場ははだかのままあるのではなく、人工衛星は精密機器なので、徹底的に湿度、気温、防塵の管理がされていた。衛星の組み立ては社員さんが自らで行っているそうだ。アクセルスペースの小型人工衛星は質量95キロ、サイズは600mm×600mm×800mmと屈強な男なら一人で持てるくらいだった。輸送はそれ専用のコンテナに入れて航空輸送するらしい。人工衛星はとてもデリケートなのに宇宙に行くとタフなのだなあと考えた。

最後に、オフィスに行く前は非常に緊張していた私たちだったが、リラックスして沢山の質問ができて学ぶことができたのは、私たちを温かく迎えて下さった太田さん方社員さ

んのお陰だと思う。本当に充実した企業研修にすることができて、改めて参加して良かったという充実感に満たされた。

## OB・OGによる懇談会

東京大学やそのほかの首都圏の大学に進学した先輩方の話を聞く機会があった。他の高校ではできない、二高ならではの企画だと思う。私たちのテーブルには東京大学在学（卒業）の先輩が来て下さった。私はどこの大学に行きたいのか？という事や、どんなことを大学で学びたいのか？、を明確に決めていないのでこの懇談会が進路に関する何かの手掛かりになれば良いなあと思い参加した。

先輩方からは東京大学の仕組みについて聞くことができた。まず自分の入りたい学部にも必ずしも入れる訳ではないということ、そして評価のつき方が相対評価であるということだ。上位3割の学生しか80点が取れないというのには特に驚いた。「高校受験は大体県内（市内）の生徒との勝負であるが、大学受験は全国の学生との勝負であるからよりハイレベルな戦いになる。」というのによく聞くことだが、東大に入れば東大生との勝負になり、しかもその中で上位三割に入らなくてはならないというのはなかなか酷い話である。東大に入ったからと言って決して油断のできない状況が続くのだ。

以上の話を聞いてさらに東大への興味が湧いた。ところで現段階で私と東大までの距離はどれくらいなのか？残念ながら仙台-東京間くらい遠く感じた。先輩方は、少なくとも二高で一回くらいは一位を取ってるとおっしゃる方や、あまり高くないとおっしゃる方でさえも低くても30位くらいとおっしゃる方ばかりだった。正直打ちひしがれそうになったが、これからの努力次第で近付きも遠ざかりもすると思う。まず直近の実力考査に全力で臨もうと思う。

曖昧だった将来のイメージが、懇談会を通して少し色付いたと思う。今度の模試の志望校欄には東京大学と書いてみよう。そのような事を懇談会の最中と後にはいろいろと考えていた。

笹川平和財団・日本財団・ディレクトフォース共済プログラム「世界を視野に、自らを生かす」グループセッション

世界を視野に働くというのはどういうことなのだろうか？舞台が大きすぎて考えた事もなかった。実際に日本から飛び出て働いている人とこのグループセッションでは話すことができた。

世界中で働くにはやはり言語や文化の隔たりで苦勞するのではないか？と思っていたが、思ったより皆さんはそれに対しては楽観的に考えているようだった。「行けば慣れる」といったような感じだった。言語に関しても、学生時代から色々な言語を習得していたり、特に秀でていたりということではなかったそうだ。

皆さんが口を揃えていう事が一つある。「自分の一番やりたいことをやる」という事だ。私は小学生のころから他の国の文化、特に言語に興味があり、割と他の国の言語には沢山触れてきたと思う。もしかしたらその「世界を視野に働く」のが自分に合っているのかも知れないと考えるようになった。

OB・OG 懇談会と同じように、将来のビジョンをより明確にする絵具となった。